

P-177 ヒト卵巣癌のターゲティング療法における抗体/薬物比と薬物投与量に関する検討

獨協医大、千葉県がんセンター研究局*、千葉大**
太田順子、時田尚志*、深澤一雄**、稲葉憲之

【目的】我々はcytokeratin-8を認識するmonoclonal抗体(MAb)6D7に抗癌剤 carboplatinを重合しヒト卵巣癌移植マウスにおける腫瘍発育抑制効果を検討してきた。今回薬物/抗体結合比の異なる2種の重合体を作成し薬物投与量も体重(g)当り90 μ g及び54 μ gの2通りにて治療成績の比較を試みた。【方法】Carboxymethyl dextran(分子量13000)を中間支持体として6D7にcarboplatinを結合させた。2種の重合体のdextran/MAB添加比は①3000:1及び②500:1とし薬物/dextran添加比は100:1に固定した。Dextran濃度は発色吸光度法にてplatinum濃度は原子吸光度法にて測定、重合体の薬物活性は通常のコロニー形成法、抗体活性は抗原吸着ビーズを用いたEIAにて評価した。腫瘍発育抑制率はヒト卵巣癌細胞OVA-1を後脚に皮下移植したヌードマウスに上記2種の重合体、薬物単独、非特異的マウスIgG-薬物重合体を7日間隔で3回腹腔内投与し5週間に亘って腫瘍容積の変化を追跡し対照群と比較した。薬物投与量は①体重(g)当り90 μ g及び②54 μ gとした。【成績】2種の重合体においてdextran及び薬物のMABへの結合率は各々約90%及び84%で差はなく結合反応後に薬物活性の低下は認められなかった。抗体活性は結合薬物量が多い程低下し①は②の約40%であった。腫瘍発育抑制率は6D7重合体①②群で薬物単独等他群より有意に高く②ではより持続的な効果が得られた。【結論】薬物/抗体結合比の小さい重合体を少ない薬物量で投与したところ持続的な腫瘍発育抑制が得られた。

P-178 術中に被膜破綻した早期卵巣癌の特徴

大分医大
管野輝勝、奈須家栄、河野康志、松井尚彦、
早田 隆、宮川勇生

【目的】上皮性卵巣癌Ic期は、腫瘍が片側または両側卵巣のみに限局し、腫瘍の被膜が破綻しているもの、腫瘍細胞を含む腹水を認めるものと定義される。なかでも被膜の破綻は自然に起こる場合と、手術操作により腫瘍被膜が破綻する場合がある。今回、我々は腫瘍摘出前の洗浄細胞診では腹腔内に腫瘍細胞を認めなかったが、術中に腫瘍被膜が破綻し、最終診断がIc期となった症例に着目し、臨床のおよび病理組織学的に検討を行った。

【方法】上皮性卵巣癌Ia期の20例およびIc期の26例を対象とした。Ic期の症例はさらに、術前に腫瘍の被膜が破綻していた症例および腹水や腹腔洗浄細胞診にて腫瘍細胞を認めた症例の群(Ic-ascites:16例)と術中に腫瘍の被膜が破綻したためIc期と最終診断された群(Ic-rupture:10例)の2群に細分して検討した。

【成績】①診断時の年齢はIa群:40.1 \pm 17.0歳、Ic-ascites群:47.6 \pm 13.4歳、Ic-rupture群:52.8 \pm 15.7歳で、Ic-rupture群の年齢は高い傾向が認められた。②粘液性嚢胞腺癌の頻度はIc-ascites群(31.3%)、Ic-rupture群(30%)でIa群(70%)に比べて有意($p<0.025$, $p<0.05$)に低率であった。③手術時には、Ic-rupture群の全例で癒着が強く、腫瘍の被膜も脆弱で、破綻し易い状態であった。④術後5年の累積生存率はIc-ascites群:87.5%、Ic-rupture群:63.5%、Ia群:100%で、Ic-rupture群の累積生存率は低い傾向が認められた。

【結論】これまで上皮性卵巣癌Ic期の特徴について、本研究のような検討成績の報告はない。術中に腫瘍の被膜が破綻した症例(Ic-rupture群)では上記のような成績であり、Ic-rupture群の取り扱いには特に注意が必要である。